

運動後の指導者からの快／不快感情喚起メッセージへの反応と 学習者のパーソナリティとの関係

—主要5因子性格検査を用いて—

石倉 忠夫

本研究は、運動・スポーツ活動時における指導者の快または不快感情を喚起するメッセージが学習者の快または不快の反応に及ぼす影響についてパーソナリティと関連づけて検討した。大学生529名を調査対象とした。分析結果から、内向的な人は快感情を喚起するメッセージに快く反応しにくい。温かい人は冷たい人よりも失敗した時の快感情を喚起するメッセージに快く反応する。などパーソナリティと快または不快感情喚起メッセージに対する反応との関連性が明らかにされた。

キーワード：運動・スポーツ、快／不快感情喚起メッセージ、パーソナリティ、主要5因子性格検査 (BigFive)

1. 緒言

スポーツや体育の授業などでは、指導者（教師）やチームメイト（仲間）からの言葉がけが選手（生徒）の動機づけやスポーツ活動自体に対する感情面に大きく影響するといわれている。例えば、長谷川（2004）¹⁾は小学校4年生の体育授業において、個人の進歩を強調した教師の言葉がけが児童の熟達や進歩を目標とする課題志向性や体育授業の満足感などの高まりと関連し、児童の動機づけ状態を良好にするのに有効であったことを報告している。また西田(1996, 2004)^{2), 3)}は小学校5年生の体育における教師からの期待や感情が高まるような発言と児童の学習意欲との関連性について検討した結果、体育の学習意欲の高いクラスを担当している教師は期待や感情を高めると思われる発言が多く、一方、体育の学習意欲の低いクラスを担当する教師は期待及び感情に関連した発言は少なかったことを報告している。運動スキルの学習において Sugawara et al. (2012)⁴⁾は、賞賛とパフォーマンスとの関連性について系列的指

ピングを課題として取り上げ検討している。練習において「トレーニング直後に被験者自身のトレーニングパフォーマンスの賞賛を受ける」「トレーニング直後に他の被験者のトレーニングパフォーマンスの賞賛を受ける」「賞賛なし」の3条件下の学習効果を検討した結果、賞賛を受けた条件は他の条件に比べて、学習された課題の突然の再生が求められた時に有意に高いパフォーマンスを示した。しかしながら、新規な系列課題では3条件間に差は認められなかったことを報告している。つまり、運動スキルの記憶における賞賛は、突然テストを実施したときに見られることを示し、学習時に与えられる賞罰や賞賛は学習者の動機づけやその後の行動や学習に影響すると Sugawara et al. (2012)⁴⁾は考察している。これらの報告から、運動の練習場面における指導者からの言葉がけは学習者の学習課題や学習自体に対する動機づけや感情に影響するといえよう。

同じ状況における同じ言葉がけであったとしても、メッセージを受け取る側によっては動機

づけや感情に与える影響は異なる可能性がある。その一つに受け取り側のパーソナリティーが上げられる。西谷・松田 (2008) ⁵⁾ は外国語学習者に激励、叱咤、賞賛のフィードバックメッセージを与えたときに不安と自尊傾向によって動機づけが異なることを報告している。また、賞罰について Sakuagi & Sugiyama (2009) ⁶⁾ は、ウイコンシンカード分類課題において敏感で心配性傾向のある女性は罰が与えられる状況でパフォーマンスが緩やかに促進したのに対し、適応力のある自信の満ちた女性は賞が与えられる状況で緩やかにパフォーマンスが促進したと報告している。これらの知見から、賞罰や励まし、賞賛は受け取り側のパーソナリティーを介して感情に作用し、動機づけに影響するものと考えられる。

石倉 (2015) ⁷⁾ はスポーツ指導時や体育授業時を想定し、運動が成功した時または失敗した時に指導者 (教師) から与えられる快感情／不快感情を喚起させるメッセージに対する反応と、受け取り手 (学習者) のパーソナリティーとの関連性について検討している。その結果、「外向的な人」は快感情喚起メッセージに高く反応し、「冷たい人」は快感情喚起メッセージに対して快く反応しない。また、「思慮深い人」は不快感情喚起メッセージに不快な反応を示さないことを明らかにしている。しかし、石倉 (2015) ⁷⁾ は調査対象者が少なかったため一部のパーソナリティー特性との関連性を詳細に検討できていないという問題点を指摘している。

そこで本研究では、調査対象者数を増やし、石倉 (2015) ⁷⁾ が報告している結果を再度検証するとともに、運動後の指導者からの快／不快感情喚起メッセージへの反応と学習者のパーソナリティーとの関係について詳細に検討することを目的とした。

2. 方法

(1) 調査対象者および調査実施方法

男子大学生 351 名 (19.6 ± 1.5 歳)、女子大学生 178 名 (19.2 ± 2.1 歳) を調査対象者とした。競技経験年数は男子大学生が 10.1 ± 10.2 年、女子大学生が 8.1 ± 10.6 年であった。なお、調査は大学講義中 (2015 年 4 月) に無記名形式で実施した。調査協力の意志は回答をもって同意を得た。

(2) 調査内容および分析対象者

調査対象者の性格を検査するにあたり主要 5 因子性格検査 (村上・村上、学芸図書) を用いた。この検査は 70 項目の質問項目に対し、「はい」「いいえ」のいずれかで回答する形式である。回答の結果から基本尺度として「外向性」「協調性」「勤勉性」「情緒安定性」「知性」について評価できる。また、各尺度の高得点 (標準得点 56 点以上) と低得点 (標準得点 44 点以下) の組み合わせにより 40 のタイプに分けることが出来る (村上・村上、1999、2008) ^{8), 9)}。一方、感情喚起メッセージは石倉 (2015) ⁷⁾ が使用した成功時における指導者からの感情喚起メッセージ (49 メッセージ) および失敗時における感情喚起メッセージ (56 メッセージ) を用いた。

主要 5 因子性格検査における頻度尺度において高得点を示した場合は、でたらめに回答していると解釈される。従って、頻度尺度を算出し、高得点を示したサンプルについては分析より除外した。その結果、男子大学生 255 名 (19.7 ± 1.5 歳)、女子大学生 133 名 (19.4 ± 1.1 歳) が分析対象になった。競技経験年数は男子大学生 10.7 ± 11.7 年、女子大学生 7.8 ± 9.0 年であった。

(3) 分析方法

分析には IBM 社製 SPSS Ver.22 を用いた。有

意水準は5%とした。

3. 結果

(1) 感情喚起メッセージの分析

始めに各質問項目の回答の分布の歪みを検討するために歪度を求めた。絶対値が1.2以上を示した項目を分析の対象から除外した。その結果、成功時のメッセージが49項目から43項目に、失敗時のメッセージが56項目から39項目に絞られ、因子分析の対象とした。

次に、成功時／失敗時のメッセージ毎に主因子法による因子分析を行った。成功時のメッセージにおける回答で「快い」を5点、「どちらともいえない」を3点、「不快」を1点のように配点し、主因子法による初期の固有値を検討した(表1)。バリマックス回転後の因子行列を検討し、因子負荷量.40以上の項目を絞って各因子に含まれている項目を確認した(表2)。石倉(2015)⁷⁾の報告で成功時快感情喚起メッセージに含まれている質問項目と比較した結果、第1因子には「その調子で頑張ろう」「いい感じになったね」「よくやった」「できている」「やればできる」が重なっており、これらを成功時快感情喚起メッセージ(5メッセージ)とした。一方、石倉(2015)⁷⁾の報告で成功時不快感情喚起メッ

セージに含まれている質問項目と本研究で抽出された因子に含まれる項目を比較した結果、第3因子が該当していた。第3因子において「その程度で喜ぶな」「調子に乗るな」「甘い」「そんなものか」という項目が重複しており、成功時に不快な気持ちにさせるメッセージが含まれていたため、これらを成功時不快感情喚起メッセージ(4項目)とした。クロンバックの α 係数を算出し、内的整合性を検討したところ、第1因子(成功時快メッセージ)は.81、第3因子(成功時不快メッセージ)は.77であった。

失敗時のメッセージにおける回答で「快い」を1点、「どちらともいえない」を3点、「不快」を5点のように配点した。そして主因子法による初期の固有値を検討し(表3)、バリマックス回転後の因子行列を検討した。そして因子負荷量.40以上の項目を絞って各因子に含まれている項目を確認した(表4)。石倉(2015)⁷⁾の報告している失敗時快感情喚起メッセージに含まれている項目と比較した結果、第1因子に「失敗は必要」「失敗を繰り返して強くなる」「ここからだ」「失敗して気づくことあるよ」「まだできることがある」「あきらめないで」の6項目が重複していたため、失敗時快感情喚起メッセージとした。また、第2因子に「何回も言わせるな」「なぜで

表1 各因子における固有値(成功時のメッセージ)

因子	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%
1	7.93	18.44	18.44	7.93	18.44	18.44	4.83	11.24	11.24
2	6.93	16.12	34.55	6.93	16.12	34.55	3.86	8.98	20.22
3	2.54	5.90	40.45	2.54	5.90	40.45	3.77	8.76	28.98
4	1.57	3.66	44.11	1.57	3.66	44.11	2.58	6.00	34.99
5	1.41	3.27	47.38	1.41	3.27	47.38	2.43	5.64	40.63
6	1.33	3.09	50.47	1.33	3.09	50.47	2.40	5.59	46.22
7	1.12	2.61	53.08	1.12	2.61	53.08	1.86	4.34	50.56
8	1.07	2.50	55.58	1.07	2.50	55.58	1.68	3.91	54.46
9	1.04	2.41	57.99	1.04	2.41	57.99	1.52	3.53	57.99

きないのか」「何回失敗するんだ」「わかってない」「もっとしっかりやれ」「次はないぞ」「誰でもできる」「練習不足」が石倉 (2015) ⁷⁾ の報告している失敗時不快感情喚起メッセージに含まれていたため、これら8項目を失敗時不快感情喚起メッセージとした。クロンバックの α 係数を算出し、内的整合性を検討したところ、第1因子(失敗時快メッセージ)は.81、第2因子(失

敗時不快メッセージ)は.82であった。

これらの結果から、成功時と失敗時の快感情喚起メッセージに対する回答を「快い」5点、「やや快い」4点、「どちらともいえない」3点、「やや不快」2点、「不快」を1点のように配点し、成功時快感情喚起メッセージ(5メッセージ)反応得点(SP得点)および失敗時快感情喚起メッセージ(6メッセージ)反応得点(FP得点)を算出

表2 バリマックス回転後の因子行列とメッセージ(成功時のメッセージ)

項目	因子								メッセージ	クロンバックの α 係数
	1	2	3	4	5	6	7	8		
s44	.74								その調子で頑張ろう	.81
s37	.70								練習の成果がでたな	
s43	.70								いい感じになったね	
s46	.69								今の良かった	
s38	.66			.42					もう一段階上を目指して頑張ろう	
s48	.58								努力が実ったね	
s24	.55	.30							よくやった	
s21	.54						.35		できている	
s41	.52	.40							やればできる	
s33		.76							才能があるね	.80
s34		.72							素晴らしい	
s40		.70							さすが	
s25	.31	.66								
s02		.61							上手だね	
s29		.52		.37						
s39			.78						その程度で喜ぶな	
s31			.67						調子に乗るな	.77
s42			.66						甘い	
s45		.81	.65						そんなものか	
s36			.63						お前の力ではない	
s35			.38						時間かかったな	

表3 各因子における固有値(失敗時のメッセージ)

因子	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%
1	9.12	23.38	23.38	9.12	23.38	23.38	5.24	13.44	13.44
2	4.92	12.62	36.00	4.92	12.62	36.00	5.01	12.85	26.29
3	2.31	5.93	41.93	2.31	5.93	41.93	3.19	8.18	34.47
4	1.47	3.78	45.70	1.47	3.78	45.70	2.95	7.56	42.03
5	1.19	3.04	48.74	1.19	3.04	48.74	1.72	4.40	46.43
6	1.10	2.83	51.57	1.10	2.83	51.57	1.60	4.10	50.53
7	1.05	2.69	54.27	1.05	2.69	54.27	1.32	3.38	53.91
8	1.00	2.57	56.84	1.00	2.57	56.84	1.14	2.93	56.84

した。また、成功時と失敗時における不快感情喚起メッセージに対する回答を「快い」1点、「やや快い」2点、「どちらともいえない」3点、「やや不快」4点、「不快」5点のように配点し、成功時不快感情喚起メッセージ（4メッセージ）反応得点（SN 得点）と失敗時不快感情喚起メッセージ（8項目）反応得点（FN 得点）を算出した。

(2) 性差と成功時および失敗時における快／不快感情喚起メッセージ反応得点との関係

成功時および失敗時の快／不快感情喚起メッセージ反応得点における性差を検討するにあたり、1 要因分散分析を用いた。その結果、SN 得点および FP 得点において、女性は男性より有意

に得点が高かった（SN:df=1/387, f=7.94, p=.005; FP : df=1/385, f=5.80, p=.017）（図 1、2 参照）。

(3) 競技年数と成功時および失敗時における快／不快感情喚起メッセージ反応得点との関係

競技年数と成功時および失敗時における快／不快感情喚起メッセージ反応得点の関連性を検討するためにピアソンの積率相関係数を求めた。その結果、有意な相関関係は認められなかった。

(4) 成功時および失敗時における快／不快感情喚起メッセージ反応得点間の関係

成功時および失敗時における快／不快感情喚起メッセージ反応得点間の関係を検討するため

表 4 バリマックス回転後の因子行列とメッセージ（失敗時のメッセージ）

項目	因子								メッセージ	クロンバック の α 係数	
	1	2	3	4	5	6	7	8			
f50	.71								失敗は必要	.81	
f24	.69								失敗を繰り返して強くなる		
f05	.61				.36				ここからだ		
f51	.59			.38					次がある		
f31	.59								失敗して気づくことあるよ		
f12	.58						.33		まだできることがある		
f08	.57		.32						次はできる		
f15	.53								あきらめないで		
f07		.73							何回も言わせるな		.82
f35		.72							なぜできないのか		
f06		.71							何回失敗するんだ		
f14		.68							ダメだ		
f22		.68							わかってない		
f25		.65							もっとしっかりやれ		
f09		.62							次はないぞ		
f46		.57							もういい		
f37		.57							誰でもできる		
f55		.54							練習不足		
f52		.51						.45	やっぱり		
f02		.46				-.31		.30	無理だ		
f13			.76						いい感じ	.52	
f26	.44		.62								
f34	.32		.57	.32							
f45			.53						役に立つ		
f21	.49		.50								
f39	.46		.49								
f33	.34		.46	.36							

にピアソンの積率相関係数を求めた。その結果、SP 得点と FP 得点の間 ($r=.589, p<.001$)、SN 得点と FN 得点の間 ($r=.594, p<.05$) に有意な相関関係が認められた。

(5) 主要5因子性格検査各尺度と成功時および失敗時における快／不快感情喚起メッセージ反応得点との関係

主要5因子性格検査各尺度における素点から標準得点を算出し、44点以下を低得点群、56点以上を高得点群、45から55点を中得点群の3群に振り分けた。そして3群間の主要5因子性格検査各尺度と成功時および失敗時における快／不快感情喚起メッセージ反応得点を1要因分散分析により比較検討した。なお、多重比較にはTukey HSD法を用いた。

外向性尺度：SPにおいて有意であり ($df=2/392, f=8.10, p=.001$)、低得点群は他群よりも得点が高かった(図3参照)。FPも有意であり ($df=2/391, f=7.17, p=.001$)、低得点群は他群よりも低得点であった(図4参照)。SN、FNに有意差は認められなかった。

協調性尺度：FPにおいて有意であり ($df=2/391, f=3.24, p=.040$)、高得点群は低得点群よりも高得点の傾向が認められた(図5参照)。その他の得点には有意差は認められなかった。

勤勉性尺度：すべての得点において有意差は認められなかった。

情緒安定性尺度：すべての得点において有意差は認められなかった。

知性尺度：SNにおいて有意であり ($df=2/393, f=5.44, p=.005$)、高得点群は他の得点群よりも低

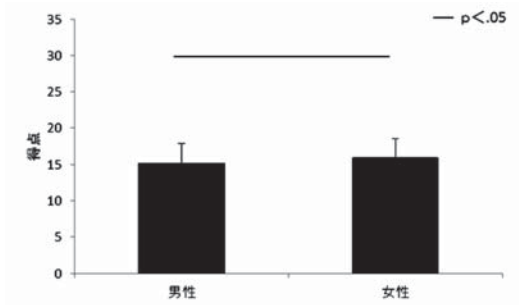


図1 性別による成功時不快感情喚起メッセージ得点の平均値と標準偏差

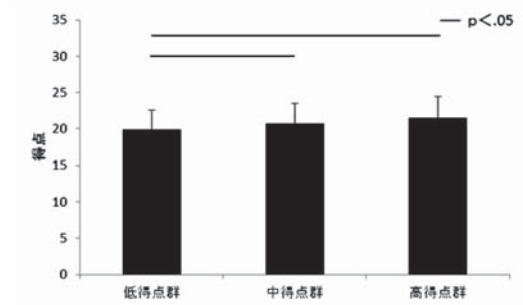


図3 外向性尺度得点群別による成功時快感情喚起メッセージ得点の平均値と標準偏差

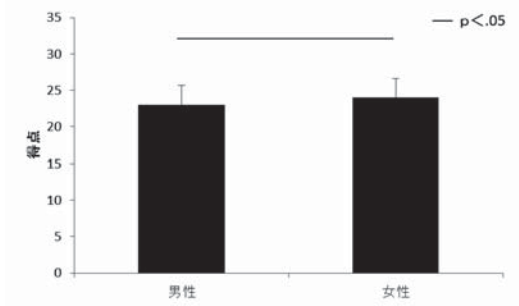


図2 性別による失敗時快感情喚起メッセージ得点の平均値と標準偏差

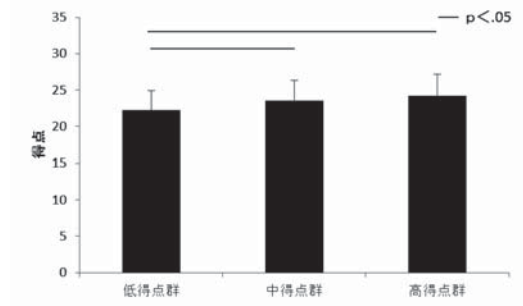


図4 外向性尺度得点群別による失敗時快感情喚起メッセージ得点の平均値と標準偏差

得点であった（図6参照）。その他の得点において有意差は認められなかった。

(6) 主要5因子性格検査各尺度の高得点群と低得点群の組み合わせによる成功時および失敗時における快／不快感情喚起メッセージ反応得点

主要5因子性格検査は各尺度の高得点と低得点の組み合わせにより40のタイプに分けることが出来る。そこでそれぞれの得点群の組み合わせによる成功時および失敗時における快／不快感情喚起メッセージ反応得点に及ぼす差異を検討した。1変量を従属変数とする2要因分散分析（尺度1〔高得点群／得点群〕×尺度2〔高得点群／低得点群〕）を用いた。分析の結果、外向性尺度×勤勉性尺度における失敗時快感情喚起メッセージ反応得点の交互作用が有意であった（ $df=1/156, f=4.93, p=.028$ ）。多重比較の結果、勤勉性高得点群の外向性尺度において高得点群（活動的な野心家）は低得点群（几帳面な仕事人）よりも失敗時快感情喚起メッセージ反応得点が高かった（図7参照）。また、外向性尺度低得点群の勤勉性尺度において低得点群（不活発で怠惰な人）は高得点群（几帳面な仕事人）に比べて失敗時快感情喚起メッセージ反応得点が高かった（図7参照）。

4. 考察

本研究は主要5因子性格検査を用いて、運動後に指導者から与えられる快／不快感情を喚起するメッセージへの反応と学習者のパーソナリティとの関係について検討した。

(1) 快／不快感情喚起メッセージと調査対象者のプロフィールとの関係

石倉（2015）⁷⁾が報告している感情喚起メッ

セージを用い、成功時あるいは失敗時における快感情／不快感情喚起メッセージを分析した。その結果、成功時快感情喚起メッセージ5項目、成功時不快感情喚起メッセージ4項目、失敗時快感情喚起メッセージ6項目、そして失敗時不快感情喚起メッセージ8項目が明らかにされた。

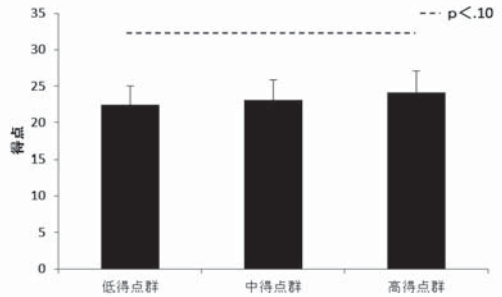


図5 協調性尺度得点群別による失敗時快感情喚起メッセージ得点の平均値と標準偏差

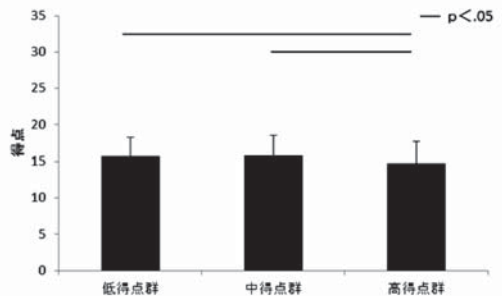


図6 知性尺度得点分別による成功時不快感情喚起メッセージ得点の平均値と標準偏差

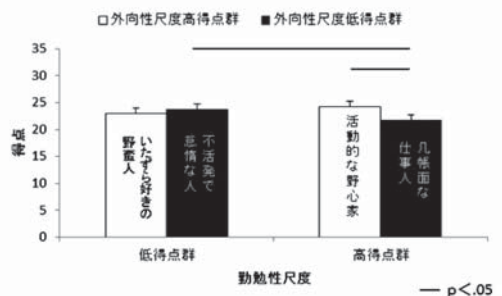


図7 外向性尺度得点群×勤勉性尺度得点群による失敗時快感情喚起メッセージ得点の平均値と標準偏差

これらの項目に対する回答を得点化し、各メッセージに対する反応得点と性差との関連性について検討したところ、成功時不快感情喚起メッセージと失敗時快感情喚起メッセージに対する得点が男性より女性の方が高かった。つまり、成功したときに不快感情を喚起させるメッセージ（「その程度で喜ぶな」「調子に乗るな」など）に対して女性の方が不快に感じ、そして失敗した時に快感情を喚起させるメッセージ（「失敗は必要」「失敗を繰り返して強くなる」など）に対して女性の方が快く感じるということになる。石倉（2015）⁷⁾は失敗時に不快感情を喚起するメッセージに対して女性は男性よりも不快に反応するという結果を報告していることから、少なくとも女性は失敗したときに不快にさせるメッセージに対して男性よりも不快に反応すると言えよう。

また、競技年数と各メッセージに対する反応との関連性について検討したところ、有意な相関関係は認められなかった。石倉（2015）⁷⁾も同様の結果を報告していることから、競技年数と感情喚起メッセージに対する反応との関連性は見られないと言える。

各感情喚起メッセージに対する反応得点間の関連性について検討したところ、成功時快感情喚起メッセージと失敗時快感情喚起メッセージに対する反応得点間、そして成功時不快感情喚起メッセージと失敗時不快感情喚起メッセージに対する反応得点間に有意な正の相関関係が認められた。この結果は、成功した時に快感情喚起メッセージに快く反応する者ほど失敗した時に快感情喚起メッセージに快く反応し、成功したときに不快感情喚起メッセージに不快に反応する者ほど失敗した時に不快感情喚起メッセージに不快に反応するという関係を示すことになる。従って、成功の場合も失敗の場合も、感情

を喚起するメッセージに対して快または不快に反応する方向性に違いはないということになるため、特に不快感情喚起メッセージに反応しやすい者に対して与えるメッセージには不快感情を喚起するメッセージを与えないように注意を払う必要があるといえよう。

(2) 主要5因子性格検査と快／不快感情喚起メッセージとの関係

本件調査で明らかにされた成功時および失敗時における快／不快感情喚起メッセージに対する回答を得点化し、主要5因子性格検査との関連性について分析した。

外向性尺度において低得点群は「交際嫌い、内向的、消極的で、社会的刺激に無関心である」いわゆる内向的な性格の持ち主であると判定されるが、成功時快感情喚起メッセージと失敗時快感情喚起メッセージの反応得点が他群よりも高かったため、内向的な性格の持ち主は快感情喚起メッセージに反応しにくいと言える。この結果は石倉（2015）⁷⁾を支持する結果であった。

協調性尺度における失敗時快感情喚起メッセージ得点において高得点群は低得点群に比べて高い傾向が見られた。協調性の高得点者は「正直で、親切、暖かい、人を信じやすい」という特徴を持った温かい人である。一方、低得点者は「利己的、不親切、独りよがり、疑い深い」といった冷たい人として判定される。従って、温かい人は冷たい人よりも失敗した時の快感情を喚起するメッセージに反応しやすい傾向にあると言える。石倉（2015）⁷⁾の報告では高得点群が0名であったため、本調査の結果から協調性と感情喚起メッセージの関連性が明らかに示されたと言える。

勤勉性尺度と情緒安定性尺度においては石倉（2015）⁷⁾の報告と同様に全ての得点において有

意差は示されなかったため、これらの尺度で明らかにされる性格の持ち主（勤勉性尺度高得点者：勤勉な人、勤勉性尺度低得点者：怠惰な人。情緒安定性尺度高得点者：気楽な人、情緒安定性尺度低得点者：神経質な人）の間に感情喚起メッセージに対する特別な反応は見られなかったと言える。

知性尺度における高得点群は成功時不快感情喚起メッセージ反応得点において他の得点群よりも低かった。つまり、高得点者は「好奇心が旺盛で、冷静で、思慮深い」という特徴を持った思慮深い人として判定されるため、このタイプは成功した時に不快感情を喚起するメッセージに対して反応しにくいと言える。石倉（2015）⁷⁾は普通の人よりも思慮深い人は成功時不快感情喚起メッセージと失敗時快感情喚起メッセージに対する反応得点が低いという結果を報告している。したがって、少なくとも思慮深いタイプの人は成功したときに与えられる不快感情喚起メッセージに対しては単純に反応しないと云えよう。

石倉（2015）⁷⁾の調査では調査対象者数が少なかったため、主要5因子性格検査各尺度の高得点群と低得点の組み合わせによるより詳細な性格と成功時および失敗時における快／不快感情喚起メッセージ得点との関連性について検討できなかった。石倉（2015）⁷⁾の調査対象者数を上回る本調査の分析結果から、勤勉性尺度高得点者で外向性尺度高得点者（活動的な野心家）は「競争心に満ち、社会的な流行や変化に敏感である」（村上・村上、2008）⁸⁾ため、「思慮深く、保守的で、用心深く、容易に他人とは打ち解けない」（村上・村上、2008）⁸⁾タイプである勤勉性尺度高得点者で外向性尺度低得点者（几帳面な仕事人）よりも失敗時の快感情喚起メッセージに反応しやすいと考えられる。また、外向性尺

度低得点群の勤勉性尺度において低得点者（不活発で怠惰な人）は「決断力がなく、煮え切らないので、物事をなかなか決められない」（村上・村上、2008）⁸⁾ため、「思慮深く、保守的で、用心深く、容易に他人とは打ち解けない」（村上・村上、2008）⁸⁾タイプである高得点者（几帳面な仕事人）に比べて失敗時の快感情喚起メッセージに影響を受けやすく反応得点が高くなったと考えられる。この結果を逆に解釈すると、几帳面な仕事人タイプは思慮深いという特徴があるため、失敗時の快感情喚起メッセージが与えられても失敗の原因と問題点を探求し問題解決に向けて正面から取り組むため、快感情喚起メッセージに反応しにくいと推察される。

本研究は、指導者からの快感情を喚起する言葉をかけられると動機づけが増し、不快感情を喚起する言葉をかけられると動機づけが減るといふ考えのもと、学習者のパーソナリティが指導者からの快／不快感情を喚起するメッセージに対する快／不快の反応に及ぼす影響について検討した。速水（2012）¹⁰⁾や西田（2013）¹¹⁾は、「屈辱」「悲しみ」「つらさ」「怒り」などのネガティブ感情が動機づけを増すことがあるため、動機づけにおける感情の役割に注目することを指摘している。したがって、指導者からの快／不快感情喚起メッセージと学習者のパーソナリティ、そして課題達成のための動機づけとの関連性について検討することが今後の課題の一つとして上げられる。

【付記】

本稿は平成 26～28 年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C) (課題番号: 26350734) 「情意的フィードバックメッセージが運動学習に及ぼす影響」の研究成果の一部である。

引用・参考文献

- 1) 長谷川悦示、小学校体育授業における「個人の進歩」を強調した教師の言葉かけが児童の動機づけに及ぼす影響. スポーツ教育学研究、24, pp13-27, 2004.
- 2) 西田保、体育における学習意欲の喚起に関する教師の発言分析. 総合保健体育科学、19, pp1-8, 1996.
- 3) 西田保、期待・感情モデルによる体育における学習意欲の喚起に関する研究. 杏林書院、2004.
- 4) Sugawara, S.K., Tanaka, S., Okazaki, S., Watanabe, K., & Sadato, N., Social Rewards Enhance Offline Improvements in Motor Skill. PLOS ONE, 7 (12), e48174, 2012.
- 5) 西谷まり・松田稔樹、外国語学習者の言語不安を4御するフィードバック. 一橋大学留学生センター紀要、11, pp35-46, 2008.
- 6) Sakuragi, S. & Sugiyama, Y., Effects of reward and punishment on the task performance, mood and autonomic nervous function, and the interaction with personality. Journal of Physiological Anthropology, 28, pp181-190, 2009.
- 7) 石倉忠夫、運動後に指導者から与えられる快／不快感情喚起メッセージと学習者のパーソナリティとの関連性. 京都文教短期大学研究紀要、第53集, pp79-89, 2015.
- 8) 村上宣寛・村上千恵子、主要5因子性格検査の手引き. 学芸図書、1999.
- 9) 村上宣寛・村上千恵子、主要5因子性格検査ハンドブック改訂版—性格測定の基礎から主要5因子の世界へ—. 学芸図書、2008.
- 10) 速水敏彦、感情的動機づけ理論の展開 ●やる気の素顔. ナカニシヤ出版、2012.
- 11) 西田保、スポーツモチベーション スポーツ行動の秘密に迫る!. 大修館書店、2013.
- 12) 石倉忠夫・藤本愛子、パフォーマンス後に快／不快感情を喚起する情意的フィードバックメッセージ. 同志社大学スポーツ健康科学、第6号、pp47-56, 2014.